

近世散文集

本田 濟
都留 睿雄

吉川幸次郎・小川環樹 監修

朝日新聞社刊

中国文明選 10

近世散文集

本田 都留
春雄 濟

ほん　だ　わたる
本　田　　濟

大正 9 年 1 月三重県宇治山田市に生れる。

昭和17年京都大学文学部中国哲学科卒業。

現在大阪市立大学文学部教授。

著書——『易学』（平楽寺書房），『易』（朝日新聞社），『漢書
・後漢書・三国志』（平凡社），『韓非子』（筑摩書房）。

つ　　る　はる　お
都　留　春　雄

大正15年 2 月福岡県北九州市に生れる。

昭和27年京都大学文学部中国文学科卒業。

現在京都産業大学助教授。

著書——『王維』（岩波書店），『中国散文選』
（共訳・筑摩書房）。

中国文明選 第十卷

近世散文集

全十五卷・第二回配本

八五〇円

昭和四十六年三月二十五日第一刷発行

著　　者　　本　田　　濟

装　　幀　　原　　弘（NDC）

発　行　者　　角　　田　　秀　　雄

発　行　所　　朝　日　新　聞　社

東京　名古屋　大阪　北九州

内外印刷・古川製本

解題

一

本書には明（一三六八—一六六二）・清（一六六二—一九一一）代の散文を集める。これに近世と題するについては格別の深意はない。訳者は宋代（十一—十三世紀）以降を近世と考えるものであるが、宋の散文の精華は、すでに朝日中国古典選『唐宋八家文』（二巻、清水茂訳注）によって紹介され、元代（十三—十四世紀）は取り上げるべき作家の数も少ないので、ともにこれを略すことにした。結果として明・清の作品でもって近世を名乗ることになつたが、ここに集められた文章を唐宋八家のそれと読み比べるとき、骨格こそひ弱くなっているかも知れぬが、情感のこまやかさにおいて、やはり、一段と現代の人間に近いものがあるであろう。その意味でも近世の字を冠すること、不当でないと考える。

なおここに用いる散文の語は、文言（文語文）についていうので、白話（口語文）を含まない。中国の散文の歴史については、前記『唐宋八家文』の解説を見られたいが、要するに、先秦から漢代（前四世紀—後三世紀）にかけて、実用的ないわゆる古文のスタイルが完成し、続く魏晉六朝時代（三—六世紀）には、装飾的な駢文（四六文）が盛行する。それに対して唐の韓愈（七六八—八二四）が古文復興を唱え、宋の歐陽修（一〇〇七—一〇七二）らがこ

れを承継いで、新しい「古文」の文体が確立した。以後、清末までこのスタイルが散文の主流を占める。随ってこの書物に収める散文も、大部分は古文である。

さきに清水茂氏が指摘しておられるように、韓愈らが打ち樹てた古文のスタイルは、秦漢のスタイルそのままではなく、駢文をも包含し止揚したものである。ということは、単に言いたいことを明確に伝えるという実用性のみならず、高度に洗練された芸術性を内包した文章でなければならなかった。そもそも文章というものは文のあることばである。「言の文なきは、行なわるとも遠からず」(『左伝』襄公二十五年)であって、いかに政治を論じ、哲学を論ずる実用のための文章でも、文がなければ説得性を持たぬ、という通念が中国にはあった。故に、「古文」が、裝飾過度で意味不明確になりがちな駢文に対して、より多く実用性を目ざしたにせよ、芸術性を没却することは遂になかった。大体、話し言葉とは遠く離れて創られた書き言葉である点では、「古文」も駢文と等しく、高度に人工的な言語である。さればこの文体でもを書くことは、中国の知識人にとっても、相当の修練と工夫を要し、この文体で書かれたものは、巧拙はともあれ、一つの「作品」であった。ここに収められる、いくつかの文章、今日の目から見て全く実用的なテーマのものである、中国では同時に芸術作品であった。そのことの正当性いかんは、味読されればわかってもらえるであらう。

二

明は、朱元璋が建てた王朝である。元代百年にわたる蒙古人の支配下から、天下を漢民族の手に取りもどし、以後三百年、概して平穩な空氣の続いた時代である。太祖、朱元璋は乞食坊主の出身で、歴代帝王のうちでも最も身

分が低い。このことは象徴的である。総じて明一代は庶民の勢力の伸展した時代で、戯曲や小説など、庶民にも理解しうる白話文学においては大きな収穫があったが、士大夫の學術・文芸においては概して創造が少ない。

清初の黄宗羲は明代の散文を集めて『明文案』二百七巻を編んだ。その序文に、「一つ一つの文章について言えば、明代にも、唐の韓愈・柳宗元、宋の歐陽修・蘇軾、金の元好問、元の姚燧・虞集のような作品が無いではない。ただ、全体として一家をなすほどの作家はいえ、明には右の諸家とならぶ人は一人もない」といい、その原因として、「三百年の人士の精神が専ら八股文に集注して、そのエネルギーの残りで古文を作るのだから、前代に及ばないのは当然である」という。

八股文とは科挙の試験答案に用いる特異な文体。科挙とは高等文官試験のことで、隋・唐（六—十世紀）に起り、宋に盛行し、明・清に完備した。これは官僚を広く民間から求めると呼号するものの、採用基準を一定にすることで天下の思想を統一し、貧寒な田夫にも受験の道を開くことでもって、或いは乱世の英雄ともなる筈の若者すべてを受験勉強に没頭させることで太平を保つという効果があった。大体、昔の中国で庶民から立身するには、科挙の一途しかなかったので、人々がこれに狂奔すること、すさまじいものがあった（清の小説『儒林外史』は科挙の時代の風気を活写する）。明の科挙は太祖の洪武十八年（一三八五）に復活した。唐代が詩賦を、宋代が経義（経書解釈）を主たる試験課目としたのに対し、明から制義というものが主な課目となる。これは主として『四書』（大学・中庸・論語・孟子）の一節から出題して、これを布衍解釈させるもの。解釈の基準を一定ならしめるために、永楽十二年（一四一四）に『四書大全』『五經大全』が勅撰されたが、すべて朱子学の思想による解釈である。制義の文体は始めは固定していなかったが、憲宗の成化年間（一四六五—一八七）以降、八股文という体が用いら

れる。股とは、もと響の足など両^{ふた}またになったものを指し、対句のこと。文中に八つの対句が要求されるので八股という（顧炎武『日知録』十六、試文格式）。この文体は内容よりも形式ばかりをやかましくいい、およそ文学性とは縁遠い。これが明の文運を阻害したこと、ほとんど定論として認めてよいであろう（清朝でも科挙に八股文が課せられたではないかという反論も可能であるが、清人の場合にはよほど馴れていて、これを超える余裕ができていた）。

黄宗羲は、明の文章は、国初が最も盛んで、嘉靖年間（一五二一—一六〇）に再度盛んとなり、崇禎（一六二八—一六四四）に三たび栄えたと言ひ、国初の隆盛は、大乱の後、士が功名を望まず、読書に耽^{ひた}っていた成果が、自然に光を放ったのによるという。宋濂（一二三〇—一八二）・劉基（一二三二—一三七五）は、まさにその人で、劉基は特に開国の元勳として名位ともに高い。宋濂の文は時に冗漫になるが、格調正しく平明である。思想的に儒教・道教・仏教を混合したようなところが見えるが、明人には通有の風で異とするに足りない。劉基の文は力強いが、時に奇を狙^あいすぎた表現がある。

宋濂とともに『元史』の編集にあたった王禕（字は子充）は、宋濂とならんで元末の黄潛に文章を学んだ人で、名は宋濂に及ばぬが、その文は醇樸宏肆（飾り気なく氣宇壮大）と評される（『四庫提要』）。「建昌州より還り経に廬山の下を行くの記」などが興趣深い。

宋濂の弟子の方孝孺（一二三六—一四〇二）は氣節の士で、その文章も線が太く、言いたいことを真^ま直ぐに言い切ろうとする。最も男性的な文と言つてよい。

高啓（一二三六—一七四）は詩人として明一代でも最も才の高かった人、その散文もまた清新で、宋・劉とはまた

別の趣きがある。「天平山に遊ぶの記」・「槎軒記」などにその特徴が見える。

右の人々は大抵、非業の死を遂げた。高啓の死は最も悲惨で、太祖の好色を詩で諷刺したのがもとで、遂に腰斬され、宋濂は流されて道中に死に、劉基は宰相胡惟庸に毒殺されたといわれる。王禕は雲南に使者として行ったが殉職した。太祖は晩年殊に猜疑心が強くて、文人の多くが直接間接に死に至らしめられた。楊基・徐賁・張羽らは一例である。方孝孺は燕王（のちの成祖）の篡奪に抗議して一門皆殺しとなった。

こうした明初文人の非命は、後人を萎縮させるのに十分であった。以後の散文は、霸氣のない、綺麗ごとだけならべたものになる。永楽（一四〇三―二四）・宣徳（一四二六―三五）の代に起こり、いわゆる三楊（楊士奇・楊榮・楊溥）に代表される台閣体の文章は、まさにそうしたものである。台閣とは内閣のこと、大臣の答弁に似たスタイルの文章をいう。一例として楊溥の「承恩堂の記」の一節を示す。

上乃ち自ら規画して有司に授く。乃ち地を都城の東南に卜す。厥の位は維れ陽、厥の土は維れ剛。材を肆に據ぶ。厥の木は維れ良く、厥の石は維れ貞く、陶瓦は維れ堅し。乃ち日の吉なるを卜し、工を鳩めて並び作る。高きを哀らして以て平らにし、虚しきに築いて以て実たし、縄を引き版を縮くし、以て厥の周に垣し、乃ち厥の堂を建つ。

台閣体の微温的な風氣にあきたらず、復古を旗幟として詩文の変革を唱道したのがいわゆる古文辞派で、弘治・正徳（一四八八―一五二二）の李夢陽（号は空同、一四七二―一五二九）・何景明（号は大復、一四八三―一五二一）、嘉靖の李攀竜（字は于鱗、一五一四―一七〇）・王世貞（字は元美、一五二六―一五九〇）をもって盟主とする（いわゆる李何李王）。李夢陽は「文は秦・漢、詩は盛唐」をモットーとした。その当時、散文の手本は依然として韓

愈・歐陽修であったが、李夢陽はことさらに反抗したのである。その議論の激するところ、「古文の法は韓愈で亡んだ」「唐以後の書は読まぬ」というに至る。鄭振鐸氏（『中国文学史』第四冊）もいうごとく、彼らの運動は陳腐で凡庸な当時の文学に喝を入れる効果はあった。また、彼らが復古を標榜したことにも恕すべき点はある。中国での革新運動は大体が復古という形を取らざるを得ないのだから。しかしすぐれた改革者は復古に託しながら全く新しいものを、時には自身も意識せずに、盛りこむものである。韓愈の古文や宋の程朱学はそれであった。李何李王も才人ではあったが、それだけの大才と学識はなかった。彼らの復古は単に古人の作をできるだけ忠実に書き写しすることに過ぎなかった。李夢陽は「書家が昔の法帖を敷き写しするの、いくら似過ぎてても構わないように、詩文も模倣でいけないわけではない」と主張し、散文においては先秦の諸子の文字を拾って、努めて古怪な表現をする。『空同集』の自序に、

李子曰く、曹鼎に蓋し王叔武ありと云う。その言に曰く、夫れ詩なる者は天地自然の音なり。今、途に丐いて巷に謳い、勞れては呻きて康らかなれば吟じ、一り唱えて群の和するは、其の真なり。斯を之れ風と謂うなり。とあるのは、まだわかりよいほうであるが、何でもないことを述べるのに異様な文字の使いかたではある。

とにかく李何李王の運動は一世を聳動し、追隨する者が多かった。黄宗羲が、「百年の人士、公超（後漢の張楷、五里霧をなした。ここでは古文辞派をさす）の霧に染まりて死する者は、大概その不学を便とするのみ」というように、より無学非才な追隨者にあつては、模倣だけで足れりとするこの派の主張が便利だったからである。わが国の荻生徂徠（一六六五—一七二八）も、「不佞天の寵靈を藉り、王李二家の書を得て以てこれを読み、始めて古文辞あるを識る」（『弁道』）と言って尊敬しているが、徂徠の古文辞学は、結果的には別の方向に伸びたものである。

李何とほぼ時代を同じくする学者に王守仁（号は陽明、一四七二—一五二八）がある。いうまでもなく陽明学の祖であり、明一代の學術史上ほとんど唯一の巨人である。それまで明の學問はすべて朱子學をそのまま繼承したもので、ほとんど創見がなかった。陽明の學問は聖人たることを目標とする点では朱子學と等しいが、方法が違う。すなわち朱子が外界の事物について個々の真理を探求し、それを帰納して行って最高の真理に到達しようとするのに対し、陽明はあらゆる真理が自分の心の中に具足しているとし、ひたすら自己の心の中に見入ることで真理を悟得しようとする。随って朱子が、個々の真理を最も多く含むものとして尊重した經書をも、陽明學では屋根裏に束ねて読まずともよいとする（陽明の思想については本選書卷六、『王陽明集』を参照）。

ここで思い起こすのは古文辭派のことである。彼らが古人の模擬のみを事とする点は陽明の學風と反對の極にあるようである。しかし彼らの気分はなにか陽明學と似たところがありはしないか。すなわち文章の道における經典ともいうべき韓・歐の放棄といい、頓悟禪的な單純なスローガンといい、己れを信ずることの強さといい、心理的傾向としては陽明學ふうである。ただ実力が伴わぬため、模擬に止まったまでである。こういうのは、王陽明が若いころ李何らと交際したこと（陽明の書いた徐昌国墓誌に「始め昌国は李夢陽・何景明數子と友たり……守仁もとより數子と善し」から兩者を無理に関係づけようというのではない。兩者とも、たまたま時流の至るところ、已むに已まねず激発したもので、心理傾向において共通するものがある、というのである）。

この王守仁は若いころ武術に、詩文に凝り、それから道教・仏教、最後に儒學に入った人である。もとより文人をもって自任する人ではない。しかしその文章は平明簡潔で力強く、同時代多くの文人の作の上にある。

三子よ、行きね。遂に使し進士に挙げられ、職に任じ列に就けば、吾れ其の能くせんことを知る。然れども欲

する所に非ざるなり。使い遂に進まずして帰り、詠歌優游日ありとも、吾れ其の樂しまんことを知る。然れども未だ必ずからざるなり。天の將に大任を是の人に降さんとするや、必ず先ず其の樂しむ所を違りて、其の欲せざる所に投ず。心に衡たわり應に払りて、その能わざる所を増す所以なり。是の玉の成るや、其れ茲の行に在るか。

右は「三子に別るるの序」(『王文成公全書』卷七)の一節である。

嘉靖年間になって、古文辞派に対抗して一家をなす人々が輩出する。王慎中(号遵巖、一五〇九—五九)、唐順之(号は荊川、一五〇七—六〇)、歸有光(一五〇六—七一)がそれで、黄宗羲が明代文章の第二の盛時と数えるのも、この人々を指す。王慎中はもと秦漢の文を模倣していたが、のち歐陽修・曾鞏を學んで、旧作をすべて焼き捨てた。唐順之も初めは古文辞派であつたのが、慎中に従つて宋の文を學ぶに至つた。「前後入蜀稿序」「吳氏墓記」など暢達で堂々とした文章である。歸有光は一介の舉人(科擧の第一段階たる鄉試通過者)の身で、韓愈・歐陽修の文を鼓吹し、當時文壇の大御所ともいうべき王世貞に挑戦して、世貞を妄庸巨子と罵つた(『項思堯文集序』)。世貞はひどく恨んだが、晩年には有光に心服したという。歸有光の文章は、『史記』の氣韻を學び取つたといわれ、叙述は簡潔を極めるが、その底に流れる抒情性は、特に肉親を思ふ諸作に至つて、時に感傷を露わにしつゝ、甚だ精彩に富む。黄宗羲は歸有光は宋濂に及ばぬというが、後人に愛読される程度は歸有光のほうが上である。これには無論、清の錢謙益や桐城派の顯彰が与つて力があるう。しかし、歸有光の、いわば兒女の情をそのまま吐露するところにこそ、後人は親近感を抱き得たのではなからうか。清人の哲學は情を肯定する傾向が強く、そのことは文學作品にも窺われる。

なお、唐順之は唐宋八家を主とする古文の選本を編み、その弟子茅坤（号は鹿門、一五二一—一六〇一）は批評を加えた『唐宋八大家文鈔』を作った。これが李攀竜の『唐詩選』とならんで息の長いベストセラーとなるが、制作の動機はそれぞれの派が典型と定めるところを示すことにあった。然しながら王・唐・帰らは、いずれも当時孤立した存在で、その主張も滔々たる古文辞の流れを覆えずに足りなかった。古文辞派への徹底的な反撃は、次の公安・竟陵二派に俟たねばならない。

万暦年間（一五七三—一六二〇）に、古文辞派に対抗して公安派・竟陵派という両派が出現する。公安派とは湖北省公安の袁宗道（字は伯修、一五六〇—一六〇〇）・袁宏道（字は中郎、一五六八—一六一〇）・袁中道（字は小修、一五七五—一六三〇）三兄弟（三袁）を主唱者とし、竟陵派とは湖北省竟陵の鍾惺（一五七二—一六二四）・譚元春（一五八六—一六三一）を盟主とする。両派とも「性靈」を重んずる点が共通である。性靈とはいわば詩魂である。袁宏道によれば、自己の胸中から自然に流れ出た詩、先人の言葉のまねでない詩こそが真の詩であると言い、詩中に俗語を取り入れることをも辞せなかった。性靈説は主として詩についての主張であるが、袁宏道の散文もまた軽妙洒脱でユーモアに富み、婦有光らとも違った新しい感覚がある。それに従来 of 碑誌伝状などの重々しい題材のほかに、日常の趣味生活にまでテーマを拡張した点も特徴である。「瓶史」「觴政」などの文はそれである。

公安派の主張をもって李贄の「童心説」の発展と見做す見解が近時一般的である（中国科学院文学研究所『中国文学史』など）。李贄、字は卓吾（一五二七—一六〇二）。「童心説」は、その著『焚書』に見える。童心とは、よけいな学問や知識に毒されない、人の初心、真心であり、これの流露した文章こそが天下の至文である。随って詩は『文選』に限らず、文は先秦に限らない。戯曲『西廂記』、小説『水滸伝』、今の八股文も至文である、と。李贄

は陽明学徒で、奇矯な言動の故に獄死した人。童心説は陽明の、わが心にこそあらゆる真理はあるという主張を、文芸面に展開させたものである。

袁宏道がその伝を書いた徐渭（字は文長、一五二一—一九三）は、書画や詩にすぐれ、奇人として聞こえた。「自ら為れる墓誌銘」など、文章も奇である。

ところで明の国運は万暦ごろから衰退に向う。外には万暦二十年（一五九二）から七年にわたる日本豊臣秀吉との戦いに続き、女真族の北方侵略がある。女真は万暦四十四年（一六一六）には遼東を完全に征服して、後金と号する国を建てた。これがのちの清朝である。内には後漢末期に似た党争が始まる。万暦二十二年（一五九四）に大臣を免職になった顧憲成が東林書院を開いて、講義のかたわら政治を批判したことから、正義派の士が多く集まって東林党を形成し、朝臣グループと対立するようになる。天啓年間（一六二一—二七）に至って、宦官の魏忠賢が朝政の実権を握ると、東林党の人々を大量に投獄殺戮した。崇禎（一六二八—四四）に入って、魏忠賢は死刑にされたが、流賊が各地に起こり、なかでも張献忠・李自成が猖獗を極めた。崇禎十七年（一六四四）、李自成は北京を陥れ、毅宗は自ら縊れ、明は事実上ここに亡びた。清はこの李自成一派を駆逐して自ら建国を宣した。そのあと明の遺臣は各地に諸王を擁して細々と反抗を続けた。南京にあった福王（年号弘光、一六四四—五）、福州にあった唐王（年号隆武、一六四五—六）、紹興にあった魯王（監国という、一六四六—五三）がそれであるが、次々に捕われ、最後まで残った永明王（年号永曆、一六四七—六一）がビルマに捕われて殺されることで、明の血脈は全く絶えた。天啓・崇禎のころ、各地に詩文の結社が盛んであった。時勢の然らしめるところで、単に文学のための会合とは言えないものがある。張溥（一六〇二—四一）の主宰する復社（東林党を継ぐものと目され、大臣に憎まれたもの

である。陳子竜（一六〇八—四七）らの幾社は、復社に呼応して起こった。張溥・陳子竜とも古文辞派の流れを汲む。陳子竜は魏晉の文を学び、駢（べん）体文にも巧み。張溥は『漢魏六朝百三集』を編んだ。古文辞派の手本を示す意図からであるが、この書が後人に裨益するところは大きい。これに対して予章社を主宰する艾南英（一五八三—一六四六）がある。帰有光を継承し、古文辞派を排撃した。

明末清初の詩壇に重きをなしたのは錢謙益（一五八二—一六六四）である。錢謙益は最も激しく古文辞派を痛撃し、息の根を止めた人。散文にもすぐれているが、通例によりこの人は清代の部に収める。

黄宗羲は崇禎の盛を招いた原因として、古文辞派の權威が失墜し、古典を学ぶ者が耳目を塞がれることなく、先人の正しい伝統を継承し得るようになったからだという。黄宗羲自身がこのころを生きた人なので、恐らく右の言も実感を語るものであろうが、そのほかに、国家の危殆にともなう士人の危機感が文章の上にも張りをもたせたという点があろう。

ふつう明一代の学芸は模倣に終始してつまらないとされる。記者の右の概説もややそういう通念に惹かれたかも知れぬ。ここでいささか弁護しておきたいのは、黄宗羲も認めるごとく、確かに作家としては八大家のような大きな存在はいなくとも、作品については色とりどりの佳作が無いではないこと。学問・思想の面でも、明人は儒教の教義に一本でない点で非難されたが、一本でない故に却って面白いところも間々ある。そのことは文章のほうでも言えるので、「文は道を載せるの器」といった儒教的な鞏固な信念は、明の文人には総じて薄れているようだが、そのこと自体、一つの新しさを指向するものであるかも知れない。

三

清は元と同様、異民族が中国全土を支配した時代である。ただ元と違って、皇帝が漢人の文化を好んで同化しようとしたこと、漢人の知識層に対して威嚇のみならず懷柔の策を用いたことから、清の学芸は大きな進展を見た。

清代の学問は考証学が中心である。考証学の祖は明の遺老、顧炎武（一六一三—一八二、本選書巻七、『顧炎武集』を参照）・黄宗羲（一六一〇—一九五）・王夫之（号は船山、一六一九—一九二）である。彼らは明末の人士がろくに書物も読まず、形而上学的な空論に耽ったに対し、經書の正確な解釈、歴史の精密な把握から始めて、国を經め民を濟うに足る実用的な学問を樹立しようとした。

清朝政府が次々に大きな編纂事業を起こし、多くの学者たちに禄を与えたことが、この精緻な学風の養成に拍車をかけた。康熙年間（一六六二—一七二二）の『明史』『康熙字典』『淵鑑類函』、乾隆年間（一七三六—一九五）の『大清会典』『四庫全書』など。特に『四庫全書』は天下の善本を集めたコレクションで、その内容の概略を要約した『提要』を作らせたが、この事業が清の学問・文学に与えた影響は大きい。ただ、清朝の思想統制は厳しかった。数々の「文字の獄（筆禍事件）」はその現われである。学者はそれを怖れて政治や哲学を語ることを止め、漢代の註釈の復元や文字・音韻の研究など、思想問題にかかわらぬ方面に没頭するようになる。乾隆から嘉慶（一七九六—一八二〇）にかけて、經学・史学の精密な考証の成果はおびただしいものがあり、そのなかには今日の科学的研究の結果と変らぬものがある。ただ顧・黄・王の経国済民の志は失われた。この考証学全体を清朝の欺瞞政策に馴致された者の已むを得ぬ悲しき玩具と見ることも可能である。しかしそれにしては考証学者たちがひたすら考

証を楽しみ、考証に安心立命している姿は、悲しき玩具とのみ言い切れぬものがある。最後の考証学者章炳麟は「学隠」という文章で、考証学者は思想統制の網をのがれて、考証に自適の道を見出した隠者であるというが、当たっているであろう（『検論』四）。

総じてこの時代の文章は平明で論理的であり、古典の教養に裏打ちされた正統的な文字の使いかたが見られる。これは考証学の隆盛と関わるものであろう。反面、内容において哲学を談じ経世の志を述べるものが少ないのも事実である。また大体に率直な感情の流露が見られるようである。これは戴震（一七二三—七七、本選書卷八、『戴震集』を参照）に代表される、この時代に共通の人欲肯定的な思想傾向と無縁でないであろう。

清初の散文作家として有名なのは侯方域（字は朝宗、一六一八—五四）・魏禧（号は叔子、一六二四—八〇）である。『簡明目録』に侯方域の文を才人の文と評するが、いかにも変幻自在の流暢な文で、時に感傷が過剰である。例えば、

老伶呉清なる者あり。嘗て沈相国の家に事するに逮ぶ。年六十余。鬚髯白きこと糸の如く、貧にして依倚するなし。乃ち陳將軍の為にその半許の歳の歌兒を教えて以て口を糊す。能く吾が郡の神宗間最盛時の事を言う。謂うに江生は晩出にして、雪苑の向の日の歌者皆な已に散じ去り、惜しむらくは未だ江生を見るを得ざりき。江生も亦た不幸にして、未だ夫の梨園の全隊、人々白雪を擅まんにし、一声を発する毎に、纏頭の贈、金錢委積するを見ず。清は老いたり。当時身親しく歴し所、今に至るも猶お数々夢にこれを見る。言う毎に嗚咽して泣下り、襟を沾して止まず（「江伶に贈るの序」）。

魏禧は議論にすぐれ、策士の文と評せられる（『簡明目録』）。「大鉄椎伝」は最も人口に膾炙する。その一節、

時に鶏鳴き月落つ。星光曠野を照らし、百歩にして人を見る。客馳せ下り、鬻策を吹くこと数声。頃之して賊二十余騎、四面より集まる。歩行して弓矢を負うて従う者百許人。一賊刀を提げ客に奔りて曰く、奈何ぞ我が兄を殺せる、と。言未だ畢らず、客呼びて曰く、椎と。賊は声に応じて馬より落ち、人馬尽く裂く。

侯・魏とならんで汪琬（号は堯峯、一六二四—九〇）がある。儒者の文と評せられるが（『簡明目録』）、あまり面白くない。

錢謙益は失節の臣で、乾隆帝が憎んでその書を焼いた人。そのため後人はその名を挙げぬが、散文においても清初の第一人者であった。

なお前掲の顧・黄の散文も淡々とした巧まぬ名文で、この後の清代散文のスタイルは、むしろ顧・黄のタイプから出発するようである（内藤湖南「清朝通論」第五講、『全集』八巻）。姜宸英（号は湛園、一六二八—九九）・朱彝尊（一六二九—一七〇九）になると、顧・黄の質朴さに魏晉六朝の華麗さを加えて新しい型の文章を作り出している。桐城派を除いて、清朝人は、明人のように文は秦漢でなければならぬとか韓欧でなければならぬとか言って、自らを限ることがない。博学をたつとぶ風氣が然らしめるのであろうが、これが文体の形成の上でも良い影響を与えている。

これよりのち、桐城（安徽省）の人、方苞（一六六八—一七四九）は、古文の文法が南宋以来崩れたことを慨いて、古文の規格を建てようとした。すなわち俗語や、魏晉六朝の対句、賦の重複した用字、詩歌の洒落れた語などは一切用いてならぬとし、明の婦有光よりも一段と枯れた文を作った。同郷の劉大魁（字は海峯、一六九八—一七七九）、姚鼐（字は姬伝、一七三一—一八一五）がこれに呼応して門戸を標榜するに及んで、桐城派が一世を風靡